

# 共生言語としての二言語使用の可能性

## —理工系大学院における日本人学生と留学生の 日英間コードスイッチングの分析から—

田崎 敦子

### 1. 研究の背景と目的

現在、日本の大学院では、大学の国際化や研究上のネットワークの拡大を目的として、積極的に留学生を受け入れている。その結果、大学院入学条件として留学生の研究内容が重視され、日本語学習歴が短く、日本語のみでコミュニケーションが難しい者の入学も増えている。しかし、こうした留学生も、大学院で研究活動を行うためには、日本人学生や他の留学生と意見交換をしながら、専門分野の知識を深めていかなければならない。また、共同研究を円滑に進めるためには、日常のコミュニケーションを通して人間関係を構築し、同じ研究室のメンバーとしての絆を深めることも必要である(田崎 2003)。

こうした留学生の背景の多様化に伴い、留学生の日本語学習の負担を軽減し、より多くの日本留学の機会を提供するために、「英語による特別プログラム」の設置が進んでいる。こうしたプログラムでは、教育、研究をすべて英語で行うため、留学生に日本語能力は要求されていない。したがって、留学生と日本人学生とのコミュニケーションも媒介言語は英語となるが、実際は、非英語圏である日本で、英語使用に慣れていない日本人学生と留学生が英語のみでコミュニケーションを行うことは難しい。

このように、現在、日本の大学院では、日本語でも、英語でも、日本人学生と留学生のコミュニケーションが難しい状況がある。これは、彼らの大学院生としての研究活動が活発に行われていないことを意味する深刻な問題である。また、意思の疎通が十分にとれていなければ、日本人と外国人という立場にある日本人学生と留学生の共生も実現されていないことになる。

岡崎(2003)は、母語を異にする者同士が共生を実現するためには、母語話者が日本語非母語話者の日本語が熟達し、母語話者と同様に話せるようになる

のを待つのではなく、彼らの日本語が不十分な段階であっても、その他の手段などを使いながらコミュニケーションを手助けすることが求められると述べている。では、大学院生にはどのような手段があるだろうか。理工系大学院の研究室における日本人学生と留学生の日本語のコミュニケーションを分析した三牧(2005)は、彼らが意思の疎通を図るために英語へのコードスイッチング(以下、CS)を頻繁に使用していると報告している。実際、日本人学生、留学生にお互いのコミュニケーションについて聞くと「日本語と英語を混ぜて」と答えることが多い。英語が留学生の日本語の理解を助けるための手段となっているのである。

母語を異にする者同士の共生のために、共生言語が必要であるとすれば、それは、英語非母語話者同士である日本人学生と留学生の英語でコミュニケーションにおいても同様であり、「共生英語」の使用が求められる。日本という非英語圏の社会で生活する両者が、英語圏で使われる英語をそのまま持ち込んでも相互理解は難しいだろう。英語で研究活動を行う多くの留学生は、日本で生活するには日本語が必要だと感じ、入学後日本語学習を始めていることから、初級レベルの日本語能力を持っている。たとえ初級レベルであっても、彼らが生活場面で使用する日本語を日本人学生とのコミュニケーションに採り入れることは自然な行為である。日本人学生と留学生が英語のみでコミュニケーションをすることが難しいのであれば、両者のもうひとつの共有言語であり、実際の生活を反映した日本語がそれを助けることができないだろうか。

このように、大学院における日本人学生と留学生のコミュニケーションでは、共生日本語として、日本語に英語を採り入れること、また共生英語として、英語に日本語を採り入れることが考えられる。

しかし、日本語のコミュニケーションにおいても、英語のコミュニケーションにおいても、二言語使用が共生言語として効果的な方法であるかはわかっていない。そこで、本研究では、日本語、英語の二言語使用を大学院における日本人学生と留学生の共生言語として捉えなおし、その働き、意義を検討する。

## 2. 研究の概要

日本人学生と留学生の二言語使用の働きを明らかにするために、以下の研究を設定した。対象としたのは、留学生の日本語能力に応じて、日本語がベース言語となり、日本人学生と留学生が「日本語母語話者一非母語話者」となる相手言語接触場面と、英語ベースで両者が「英語非母語話者」となる第三者言語接触場面のコミュニケーションである。

1. 相手言語接触場面における CS の統語的・機能的分析（日本語ベース）【研究 1】
2. 相手言語接触場面におけるコミュニケーション・ストラテジーとしての CS の働き【研究 2】
3. 第三者言語接触場面における CS の統語的・機能的分析（英語ベース）【研究 3】
4. 接触場面における CS が参加者の参加方法に与える影響【研究 4】

### 2.1 相手言語接触場面における CS

日本人学生と留学生が日本語をベースに行ったグループディスカッション 10 組を対象に、そこで使われた CS の統語的、機能的分析を行った。この場面での CS は、留学生の日本語能力を補うことが主目的であるため、留学生の方が多くの CS を使用していた。品詞別に見ると、日本人学生も留学生も語彙レベルの CS を最も多く使用し、その語彙の大半は、日本語の文の一部に埋め込まれる「文中 CS」として使われていた。日本語から英語への CS では、日本語の名詞部分のみが CS が可能という統語的規則があるが (Azuma 1997)、この規則によると、英語の形容詞は形容動詞となり、動詞は「する」と共に使われることになる。日本人学生は概ねこの規則に従い CS していた。一方、留学生の CS は常に規則に従うことなく、英語の語彙に様々な日本語を付加しており、日英の CS だけでなく、日本語の統語規則に反するものもあった。しかし、文脈に合った意図を表現するという点からは適切なものであり、コミュニケーション上の役割は果たしていた。

英語への CS の機能については、「内容伝達・理解の補助」「明確化」「強調」「談話調整」「フレーム形成」「人間関係構築」の 6 つが観察された。これらの機能は、グループディスカッションの促進に不可欠な「意見交換」「レポート形成」を助ける働きをしていることがわかった。

### 2.2 コミュニケーション・ストラテジーとしての CS の働き

相手言語接触場面における CS の主要な使用動機である留学生の日本語能力の補償は、第二言語習得研究においてコミュニケーション・ストラテジーとして位置づけられている。その中で、CS は、目標言語を使用しないという点で否定的に捉えられてきた (Faerch & Kasper 1983; Tarone, Cohen & Dumans 1983)。これに対して、Firth & Wagner (1997) は、CS が問題なのではなく、重要なのは CS を使った後のやりとりだと述べている。例えば、CS が意味交渉のきっかけとなり結果として相互理解に達すれば、CS はコミュニケーションにおいて有効に働いたことになるという。また、コミュニケーション・ストラテジーの研究では、従来、非母語話者の使用のみが対象になってきたことが批判され、その効果を見るためには、母語話者の行為も含めた分析が必要だといわれている (Williams, Inscoc & Tasker 1997)。

これらの議論はいずれも、コミュニケーション・ストラテジーとしての CS の働きを見るためには、CS を含めたやりとりの中でどのようにコミュニケーションの問題が解決されるかを分析しなければならないことを示唆している。そこで、本節では、前章と同じ日本人学生と留学生のグループディスカッションを対象に、英語への CS が留学生のコミュニケーション上の問題をどのように解決するのかを明らかにする。

グループディスカッションでは、留学生が語彙や文法能力の不足から、自分の意見を十分に伝えられない、または相手の言うことを理解できないという問題が起きていた。しかし、CS を使い、日本人学生にわからない語彙を尋ねたり、日本語では表現できない部分を英語にして伝えたりすることで、ディスカッションの流れを大きく妨げずに留学生の参加を助けることができた。

ただし、日本人学生も留学生も共に英語非母語話者であるため、常に適切な英語を話せるとは限らず、CS された英語が参加者全員に理解されないことや、

また留学生に日本語の意味を聞かれても日本人学生が適切な英語訳を提供できないことがあった。こうした問題は、参加者がお互いに英語能力を補うことで解決された。しかし、留学生が聞き手を考慮せず、英語のみで長いターンを取ると、英語を理解できない参加者を他の参加者が助けることも難しく、話題が発展しないという場面も見られた。

コミュニケーション・ストラテジーとしてのCSは、時間をかけずに留学生の日本語能力を補うことができるという特徴がある。これは、複数の参加者が次々とターンを取り合い、話題を発展させるグループディスカッションでは大きな利点であった。しかし、実際に、CSを効果的に使用するためには、日本人学生と留学生が協力して、お互いの日本語能力、英語能力を補い合うことが不可欠であることがわかった。こうした結果は、CSを非母語話者の言語習得の観点からではなく、母語話者、非母語話者の相互理解に注目して分析したことで得られたものである。

### 2.3 第三者言語接触場面におけるCS【研究3】

英語は、日本人学生、留学生の双方にとって母語ではないため、両者が英語でコミュニケーションを行う場合、第三者言語接触場面となる。研究3では、「Intercultural Communication」という大学院の講義（使用言語:英語）で行われたグループワークのコミュニケーションで使われた日本語へのCSを対象とする。

分析の結果、統語面では、日本人学生も留学生も名詞へのCSが最も多く、その名詞は、相手言語接触場面とは異なり、文中CSは少なく、ほとんどが単独で使われていることがわかった。また、名詞は「先生」「研究室」など大学院生活に関連するものが多く、日本人学生より留学生の方が積極的にこうした名詞を使用していた。文へのCSも見られたが、留学生の日本語能力が初級であったため、すべて単文であった。日本人学生も留学生の日本語能力に合わせたためか、単文のみの使用であった。しかし、両者の文の使用場面には相違が見られた。留学生は「か」「ね」などの助詞を日本語の文の終わりに付加し、相手への関与を示していた。一方、日本人学生は「難しいなあ」など自分自身に語りかけるものが多く、相互行為を促進するものではなかった。

機能面では、「明確化」「強調」「関与の強化」「フレーム形成」「アイデンティティーの共有」「人間関

係構築」「交話の促進」が観察され、これらがグループワークに必要な「意見交換」「レポート形成」を助けていた。こうした結果から、初級レベルの日本語でも、英語と共に使用することで、日本人学生と留学生のコミュニケーションの促進に貢献できることがわかった。

### 2.4 CSが参加者に与える影響

ファン(1998)は、言語管理理論にもとづく一連の研究から、日本語の相手言語接触場面、第三者言語接触場面における母語話者、非母語話者の参加の特徴を示している。相手言語接触場面では、母語話者が「接触場面のオーソリティー」として、非母語話者の言語能力を補い、会話をコントロールする傾向がある。一方、非母語話者は、言語ホストに支援を求めたり、参加を回避したりしながら、自らの言語問題を調整するという。これに対し、参加者が共に日本語非母語話者である第三者言語接触場面のコミュニケーションでは、参加者が協同で解決しようとするストラテジーがより多く使用されるという(ファン1998, 1999)。

これらの結果は、使用言語がひとつという前提で得られたものであり、本研究のように、コミュニケーションの過程で使用言語が変化する場面に適応されるかどうかかわからない。そこで、CSが参加者のコミュニケーションへの参加にどのような影響があるのかを調べた。その結果、相手言語接触場面においては、CSを使い、留学生が日本人学生に日本語の意味を尋ねるなど「日本語母語話者—非母語話者」の関係が引き出されていた。また、英語のみの使用になると、両者のより対等な参加が見られると同時に、日本人学生の心理的負担が大きくなっていることもわかった。一方、第三者言語接触場面では、英語使用の中に日本語が使われることで、母語話者となった日本人学生が緊張感から開放され、英語使用場面より内容のある発話が増えていた。興味深い点は、どちらの場面においても、両者が日本語と英語を混ぜて、独自の表現を創造しながら相互理解を達成しようとする「日英混合話者」としての参加が見られたことである。

このように、CSにより使用言語が変化し、多様な関係が創造されることで、言語背景の異なる参加者がより多くの発話の機会を得られ、相互行為が促進されることがわかった。

### 3. まとめ

本研究では、理工系大学院で学ぶ日本人学生と留学生の共生言語としての日本語と英語の二言語使用の働きを明らかにするために、相手言語接触場面、第三者言語接触場面のコミュニケーションにおけるCSを統語面、機能面から分析した。その結果、日本人学生、留学生は、それぞれ日本語や英語の能力が限られているにも関わらず、どちらの場面においても様々な統語的形式へCSしていた。そして、そのCSには複数のコミュニケーション上の機能があることがわかった。

両場面で見られたCSの機能は、移民など日常的に二言語を使用している話者たちにも使われているものであった(Gumperz 1982; Nishimura 1995)。これは、日本人学生も留学生も、日本語と英語の二言語を使い、それぞれの能力を補うだけでなく、自分たちのコミュニケーションをより豊かにしていることを示している。そこでは、「日本語母語話者」「日本語非母語話者」という、日本語能力の高さで両者の関係が作られるのではなく、それぞれが持っている日本語と英語という言語リソースを活用しながら、相互理解を図ろうとする「バイリンガル」の関係が構築されている。このように言語面で両者がより対等になれば、同じ大学院生としての関係を構築するための大きな助けとなる。研究4で示したように、英語のみでは両者のコミュニケーションは非常に難しい。つまり、留学生に日本語能力があったからこそ「バイリンガル」としてのコミュニケーションが可能だったのである。

大学院で日本語を学ぶ留学生に最も必要なのは、日本語を使って日本人学生と研究について話し合える能力である。彼らが自分の考えを出し合い、専門の知識を広げ、研究仲間としての関係を深めることができたとしたら、それが彼らにとっての「共生」だといえるだろう。日本語と共に英語を使うことがこうした共生の実現を助けるとすれば、そこに二言語使用の大きな意義がある。

日本語教育においても、教師は、日本人学生と留学生にとっての二言語使用の働きを認識し、彼ら

の相互理解、関係構築を目的とした活動においては、二言語使用を許容することを考える必要もあるだろう。

### 参考文献

- 岡崎眸 (2003) 「共生日本語としての日本語」教育への歩み」科学研究費補助金研究基盤研究(B)研究報告書 140-154.
- ソーヤー理恵子・三登由利子(1998)「工学部研究留学生の日本語使用実態調査—既習者向け日本語研修コース修了生と研究室の日本人へのインタビュー調査から—」多文化社会と留学生交流』第2号, 63-67.
- 田崎敦子 (2003) 「科学技術系大学院留学生に必要な日本語教育—研究活動を支援するコミュニケーション能力・異文化理解能力の養成—」『現代のエスプリ』7, 175-183.
- ファン、サウクエン(1998)「接触場面における言語管理」『国立国語研究所日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成研究会発表原稿・会議用録』、1-16.
- ファン、サウクエン(1999)「非母語話者同士の日本語会話における言語問題」『社会言語科学』第2巻第1号、37-48.
- 三牧陽子 (2006)『大学コミュニティにおける留学生のコミュニケーションに関する研究』平成14年度～平成17年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書.
- Azuma, S. (1997) Lexical categories and code-switching: a study of Japanese/English code-switching in Japan, *Journal of the Association of Teachers of Japanese*, Vol.31 (2), 1-21.
- Faerch, C. & Kasper, G. (1983). Plans and strategies in foreign language communication. In C. Faerch & G. Kasper (Eds.), *Strategies in Interlanguage Communication*, New York: Longman, 20-60.
- Firth, A. & Wagner, J. (1997) On Discourse, communication, and fundamental concepts in SLA research, *The Modern Language Journal*, 81, 285-300.
- Tarone, E., Cohen, A.D., & Dumans, G. (1983) A closer look at some interlanguage terminology: A framework for communication strategies. In C. Faerch, & G. Kasper (Eds.), *Strategies in interlanguage communication*, London: Longman, 4-14.
- Williams, J., Inscoc, R & Tasker, T. (1997) Sociolinguistic perspective on L2 communication strategies, In G. Kasper & E. Kellerman, *Communication Strategies: Psycholinguistic and Sociolinguistic Perspectives*, London: Longman, 304-322.

たさき あつこ／東京農工大学留学生センター  
tasaki@cc.tuat.ac.jp